

2008年6月26日

## コガムシの会 田んぼの生きもの調査

主催：コガムシの会

共催：大潟村農地・水環境保全向上対策推進会議

参加団体：コガムシの会、大潟村農地・水環境保全向上対策推進会議、コープやまなし他

日時：2008年6月26日

**田んぼに牧草「ヘアリーベッチ農法」。  
水を循環させるのがコツ。**

地平線まで田んぼが続く秋田県大潟村。田んぼの生きもの調査は、今年も絶好の天気恵まれ、広すぎて木陰がないのが困るほど。それでも地元の農家をはじめ、遠く山梨県からコープやまなしの職員さんら40名弱が参加して行われました。

今年は先進的な農家がひしめく大潟村でも「一、二を争う篤農家で、有機農業の新しい技術を率先して導入してきた」とコガムシの会・事務局の今野克久さんが敬愛する、白戸浩栄さんの有機栽培の田んぼが会場となりました。

特徴は、牧草の一種であるヘアリーベッチを緑肥としてまいていること。雑草を抑え養分を供給する相乗効果を狙います。白戸さんは同農法でも第一人者だといいます。

一昨年、やはり「ヘアリーベッチ農法」の田んぼで調査を実施したときには、生きものが少なかったため、講師の岩渕成紀氏をはじめとする経験者は、今回も、ヘアリーベッチの茎などが腐敗して有機酸を生じて、生きものは少ないだろうと予想していましたが、水を常時かけ流し、「川のようにいつも水が循環している」（今野さん）状態のため、「他の有機栽培の田んぼと同じように」生きものがいました。

これには、初めて参加したコープやまなしの職員さんたちもビックリ。「田んぼに、こんなに生きものがあるとは思わなかった」等々、異口同音に感想を述べていました。

また、生きものと経営がどう結びつくのか、半信半疑で参加した地元の農家の皆さんも、農薬を使わないでもやれる、という可能性を感じたようでした。

### 見つけた生きもの：

イトミミズ（75万匹/10a）、ユスリカ（900万匹/10a）、コガムシ幼虫（1万匹/m<sup>2</sup>）、オタマジャクシ、トノサマガエル、アマガエル、ミジンコ、タニシ、モノアラガイ、チビゲンゴロウ、ヒメゲンゴロウ、ガムシ幼虫、ゴマフガムシ幼虫、ヒル、ヒメアメンボ、ヤゴ類、アキアカネヤゴ、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、コモリグモ、ハネカクシ、イナゴ類、トビムシ、ドジョウ、ウキゴリ、シラウオ、ワカサギ、ヌカエビ、シラサギ、ケリ、セグロセキレイ、カイツブリ、ヒバリ、オオヨシキリ、カッコウ、ウグイスなど

### 調査結果から：NPO法人田んぼ 岩渕成紀さん

一昨年、調査した同じヘアリーベッチ農法の田んぼは、中干し期に近く、水の流れがない湿地のような状態だったためか、強酸性で、生きものがあまりいませんでした。今回の白戸さんの田んぼは、取水口から常に水を入れ、排水口から常に水を出しているため、水生生物が豊富で、それをエサにする野鳥の飛来も盛んに見られました。また、民間稲作研

究所の稲葉光國氏の田んぼのように、イトミミズよりユスリカが多いことも大きな特徴です。これは長年、有機栽培を続けてきたからでしょう。